教育研究業績

2025年 5月 1日

氏名　保坂嘉成

研究分野	学位
成人看護学	修士（保健看護学）

研究のキーワード

がん看護、アディクション、HIV

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 なし		
2　作成した教科書，教材 なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
東京大学医学部附属病院 第9回NST全体会議＆CancerBoardセミナー 第2回化学療法嘔気嘔吐対策講習会 「嘔気嘔吐ゼロを目指して 13階南病棟の取り組み」	平成22年1月	東京大学医学部附属病院キャンサーボードとNST（病態栄養治療センターを中心とした栄養サポートチーム）が共催した講習会において、有効な臨床実践結果が得られたため、医師、薬剤師、看護師、コメディカルや医学生や看護学生等に対して症例発表した。その結果、嘔気嘔吐対策や支持療法に対して、知識や技術を教育が図られた。また、本事例に関しては、学会発表も行った。
東京大学医学部附属病院 実習指導実績	平成22年 12月～平成27年3月	東京大学医学部健康総合科学科看護科学専修の学生に対し、健康問題に応じた日常生活援助の理論と実践、看護倫理の点に注意しながら指導を行った。その結果、全人的な看護の必要性を理解し、健康問題に着目した知識や技術の定着が図られ成人看護学実習を修了することができた。
東京大学医学部附属病院 キャリアラダーⅢ 看護臨床研究文献検討（クリティーク）について （講師）	平成23年4月～平成27年3月	東京大学医学部附属病院看護部のキャリアラダー教育の一環として、臨床研究におけるクリティーク実践能力向上を図る目的で4年間講師を行い、看護研究の基礎知識のて定着へ寄与することができた。
東京大学医学部附属病院 実習指導者研修　（講師）	平成23年7月	東京大学医学部附属病院実習指導者研修の講師として、「看護学生のレディネスと効果的な指導方法」について講義を行った。この講義により、東京大学医学部健康総合科学科看護科学専修の学生実習指導者を教育することができ、教育に関する知識や技術の定着が図られた。
東京大学医学部附属病院看護部症例発表 神経難病患者の人工呼吸器装着に関する意思決定支援	平成23年8月	東京大学医学部附属病院看護部において患者への看護実践が高く評価され、院内の看護師への教育の一環として事例報告を行った。看護実践能力の推進に向けて東京大学看護学科学生や本学教員、看護師へ働きかけを行うことができた。
東京大学医学部附属病院 看護部看護部主催 安全対策委員会 役割研修「安全対策Ⅰ」　A棟13階南病棟における 転倒転落予防に関する安全対策フロア委員の活動について （講師）	平成24年6月	東京大学医学部附属病院 看護部主催 安全対策委員会において、転倒転落に関する有効な予防策を実施し、症例発表を通じて、医療安全管理における知識や技術等の普及に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院 中途採用者 経験者フォローアップ研修 （潜在看護師再就者対象） （講師）	平成25年4月	東京大学医学部附属病院看護部看護師の中採用者及び経験者入職者の潜在看護師に対して、医療安全の知識の普及や中途採用者が抱える前院とのマニュアルの違いや最新の医療・看護技術等による疑問等に回答しながら講義を行った。それにより、医療安全の意識づけや早期離職者軽減に寄与することができた。

東京大学医学部附属病院病院長主催中途採用者（新たに診療を行う医師）対象研修　（講師）	平成25年4月	東京大学医学部附属病院に新たに診療を行う医師に対して医療安全対策センター専任医療安全管理者として、医療安全管理に関する基礎知識について講義した。病院の診療及び教育を行う医師に対して医療安全管理学を講義することにより、病院全体の安全管理について理解の共有が図られた。
東京大学医学部附属病院 中途採用者 経験者フォローアップ研修 医療安全対策センター 専任医療安全管理者 （講師）	平成25年4月～平成27年4月	東京大学医学部附属病院看護部看護師の中採用者及び経験者入職者に対して、医療安全管理学の視点で教育を行うことにより、医療安全の知識の普及や中途採用者が抱える前院とのマニュアルの違いによる疑問等に回答しながら講義した。それにより、医療安全の意識づけや早期離職者軽減に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院医療安全対策センター、ＴＥＲＵＭＯ共催 体験型医療安全セミナー　（講師）	平成25年12月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者が輸液ポンプやシリンジポンプによる事故を未然に防ぐため、発生する頻度や危険性が高いもの（フリーフロー、サイフォニングなど）についてＴＥＲＵＭＯ製品を用いて体験学習を行った。日常使用している製品の特性を理解し、その危険性にあった具体的な対策を実践することがきるようになり実践能力に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　看護フェスタ 入院中の転倒や外来の転倒しやすいフロアリスクマップを作成し、ポスターセッション	平成26年5月～平成26年6月	東京大学医学部附属病院看護部の活動を、入職を希望している看護学生や当院に通院している患者様やそのご家族様に看護部の学術的な取り組みや歴史を紹介した。そこで当院の転倒転落箇所の分析を行い、リスクマップを作成し、多くの外来患者や入院患者に情報共有を図り、注意喚起を行った。このリスクマップは、有益であると判断さて、入退院センターでリーフレットとして配布されるようになり、多くの患者への注意喚起に用いられることになった。
東京大学医学部附属病院 看護部フロア委員研修 安全対策1　（講師）	平成26年6月	東京医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、看護部安全対策フロア委員メンバーに対して、当委員会の今年度の目標について講義を行った。自部署の病棟で具体的な活動が実施できるよう病棟内目標の立案と対策案を作成し、情報共有を図ることができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅱ-A】（講師）	平成26年6月～平成26年7月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、新卒採用者2～3年目程度者に対して、投薬プロセスの発生と未然発見データの分析より、ヒューマンエラーが生じやすい項目について講義を行った。エラー防止対策の実践方法と確認動作について演習を行い、有効性の高い確認手順と確認方法の理解向上に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅰ-B】（講師）	平成26年7月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、日常生活援助の際に起こりやすいリスクについて、リスク想定と具体的な対策案について講義を行った。その後、グループワークで全身清拭時の胃管の自己抜去・車いす移送介助時の点滴事故抜去について事例検討を実施した。その結果、医療安全管理学の重要性について周知することができた。
東京大学大学院医科学系研究科医療安全管理学講座　SPH実習・プログラム　（座長）	平成26年9月	東京大学大学院医科学系研究科医療安全管理学講座の医学生に対して、事例検討会、座談会、東京大学医学部附属病院医療安全対策センターの院内ラウンド、医療安全委員会分析小委員会に出席し実地研修を行った。座長として、ファシリテーターや、各診療科医師、看護師長等へのカンファレンスを中心的に行った。医療安全管理学の臨床応用について実際の医療現場をラウンドを通じて、知識の定着が図られた。

東京大学医学部附属病院 看護部フロア委員研修 安全対策2　（講師）	平成26年10月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、看護部安全対策フロア委員メンバーに対して、医療事故未然防止対策として有効な「インシデントKYT」について講義を行った。インシデントKYTはラウンドごとの重要なポイントを説明し、実際の自部署で容易に使えるアセスメントシートを開発し運用した。その結果、薬剤間違いや部位間違いなどのインシデントの減少に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅰ-C】（講師）	平成26年11月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、今年度新卒採用者4月から10月集計426件分のインシデント分析結果に基づき講義を行った。症例検討として、内服薬、注射輸液、食事に関する事例を紹介し、患者誤認防止方法、取違い防止方法（ダブルチェック）の具体的な方法や確認技術、ノンテクニカルスキルについての知識の定着に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院 看護部フロア委員研修 安全対策3　（講師）	平成27年1月	東京医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、今年度の安全対策フロア委員としての活動を振り返り、次年度の課題を明確にするため講義を行った。その結果、具体的且つ有効で実践可能なフロア目標作成することができた。
東京大学医学部附属病院看護部教育担当主催 役割研修 エルダー　（講師）	平成27年2月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、新採用看護師のプリセプター教育を担うエルダーに対して、今までのインシデント事例の症例発表をしたのち、グループ演習において未然防止や再発防止策を立案してもらい、新採用者へ指導する模擬演習を行った。医療安全管理学に基づいて指導する難しさや指導するためのノンテクニカルスキルを学習することで、指導力の向上が図られた。
司法修習所裁判官現場研修　大学病院の安全管理 看護部の医療安全推進活動　当院センターラウンド　（講師）	平成27年2月	司法修習裁判官現場研修の一環として、東京大学医学部附属病院医療安全対策センターの医療安全推進活動について事例紹介を行った。医療安全管理学についての基礎知識を説明したうえで、臨床現場でどのような医療安全推進活動を実施しているか、ラウンドを通じて解説を行った。今後の医療事故関連裁判の礎になると期待する。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅰ-A】　（講師）	平成27年5月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として薬剤取違い、患者間違い、確認照合ミスの事例紹介をした。そして、どのような原因や要因があったことでインシデントが発生してしまったのかメカニズムを解説し、再発防止の観点から確認行動の重要性を再認識することで医療安全確認技術の向上に貢献できた。
東京大学医学部附属病院看護部教育担当主催 役割研修 プリセプターフォローアップ研修　医療安全管理の基本　（講師）	平成27年5月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、新卒採用者を教育するプリセプターに対して、医療安全対策マニュアルを通じて手順の再確認、インシデント分析結果や事例紹介を行った。その結果、医療安全管理の診療展開方法やPDCAサイクルについて周知することができた。

東京大学医学部附属病院　役割研修「プリセプターフォローアップⅠ」（講師）	平成27年5月～平成27年6月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として新人看護師が起こしやすいエラーの分析結果を説明したのち、その具体的な再発予防策について講義を行った。新人看護師がわかるよう指導することができるためにグループワーク演習を行い、ノンテクニカルスキルを用いながら解説した。実際の指導の想定場面を設置したことでイメージがわきやすく、指導のプロセスが理解の向上に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅱ－A】（講師）	平成27年6月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、新卒採用者2－3年目程度者に対して、投薬プロセスの発生と未然発見データ、ヒューマンエラーが生じやすい項目を提示しながら講義を行った。エラー防止対策の実践方法と確認動作について演習を行い、有効性の高い確認手順と確認方法の理解向上に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅰ-B】　（講師）	平成27年7月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として、看護師のケアで最も多い日常生活の援助で生じやすい「移動の介助」「全身清拭」「車椅子の移送介助」についての潜在的なリスクについて講義を行った。より安全な日常生活援助方法について、グループワークを通じて検討した。各グループより有効性の高い対応策が挙げられ、その知識を共有することで医療安全技術の向上に寄与することができた。
全国医学部長病院長会議「医療事故調査制度に関するガイドライン」の作成	平成27年11月	国立大学病院長会議医療安全協議会の代表校（東京大学医学部附属病院）の専任医療安全管理者として全国医学部長病院長会議「医療事故調査制度に関するガイドライン」を中心的な役割を果たしながら作成を行った。その結果、全国の医学部附属病院の指針として現在まで用いられ、医療安全に寄与することができた。
東京大学医学部附属病院　キャリアラダーレベル別研修【Ⅰ－C】　（講師）	平成27年11月	東京大学医学部附属病院医療安全対策センター専任医療安全管理者として注射点滴のハイリスク薬の投与方法、ミキシング方法や取り扱い方を講義した。その結果、医薬品の特徴や管理方法について理解向上に寄与することができた。
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
看護師	平成14年5月	厚生労働省第1162390号
介護支援専門員	平成24年4月	13120783
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
秋田大学医学部附属病院看護部 消化器外科、脳神経外科、小児外科	平成14年4月～平成16年3月	秋田大学医学部附属病院消化器外科、脳神経外科、小児外科の看護師として、成人看護学領域（急性期）、小児看護学領域の看護業務に従事した。
山口大学医学部附属病院看護部看護師 高度救急救命センター	平成16年4月～平成18年3月	山口大学医学部附属病院高度救命救急センターの看護師として、看護業務に従事した。救急看護学、成人看護学領域（クリティカルケア）、小児救急領域の実践を行った。

東京大学医学部附属病院看護部看護師兼副看護師長、専従医療安全管理者 神経内科、呼吸器内科、総合内科、ICU、CCU、研究教育担当、医療安全対策センター	平成20年4月～令和2年3月	東京大学医学部附属病院 神経内科、呼吸器内科、総合内科、ICU、CCU、研究教育担当、医療安全対策センターの看護師として、看護業務に従事した。 神経内科、呼吸器内科、総合内科の看護師として、成人看護学領域（急性期、慢性期）、老年看護学領域、地域看護学領域について看護実践を行った。 ICU、CCUの看護師として救急看護学、成人看護学領域（クリティカルケア）、小児救急看護学領域の看護実践を行った。 看護部教育担当では、クリニカルラダーに基づき、新卒看護師から管理者まで臨床教育（看護教育学）を実践した。また、東京大学医科学研究所附属病院と共同して、看護研究についても支援的な立場で実施した。 医療安全対策センターの専従医療安全管理者として看護管理学領域、医療安全管理学の看護実践を行った。 副看護師長として、看護管理学領域の看護実践として、看護師長補佐、労務管理、人材育成、病院経営等を実践した。
さいたま市立病院看護部看護師兼主任 さいたま市保健福祉局 消化器外科、血管外科	令和2年4月～令和3年6月	さいたま市立病院消化器外科、血管外科の看護師として、成人看護学領域（急性期および慢性期）、老年看護学領域の看護師として看護業務に従事した。また、主任として、看護管理学領域の看護実践として、看護師長補佐、労務管理、人材育成、病院経営等を実践した。
安東病院 包括ケア病棟兼救急外来部門	令和6年1月～	安東病院（ケアミックス・地域密着型病院）の看護師として勤務している。急性期医療から慢性期医療およびターミナルケアを網羅している病床群で勤務し、最新の医療を臨床を通じて実践している。また、救急外来部門も併設されており、夜間救急にも対応している。
4　その他 なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 救急看護師の早期栄養アセスメントに関する意識調査	共著	平成16年12月	山口大学院内看護研究発表会集録　2004;16: 52-57	救命救急センターで救急看護師の早期栄養アセスメントに関する認識と実態を把握することを目的とした。救命センター看護師44名に栄養指標項目、早期栄養アセスメントの必要性、時期などの認識および実態について独自に作成したアンケート用紙を配布し留置回収法で回収し分析を行った。栄養指標項目では、「身長・体重」「食事摂取量」「摂取方法」「褥瘡」「浮腫」「アルブミン値」が多かった。入院時栄養アセスメントの必要性に対する認識は高く、初回栄養アセスメントは入院後2～3日目が高かった。情報を得る際、最も障害となるのは、「救命処置や状態観察が優先される」ことであった。今回の調査によって栄養アセスメント（ＮＳＴ）の基準を作成し、統一した評価指標によって医師と共に栄養管理に取り組むことの重要性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：梅田由美, 後藤直美, 藤野純子, 綿貫純子, 保坂嘉成, 倉田町恵.

染色体検査における自律的意思決定支援のための説明書作成 （修士論文）	単著	平成20年3月	川崎医療福祉大学大学院	説明書項目の検討には，遺伝学的検査に関するガイドライン（遺伝医学関連10学会平成15年）およびO'Connorらの国際共同研究 IPDAS Collaborationによる意思決定支援ツールの品質評価基準（64項目）を用いた。染色体検査説明書に適した27項目を採用した。意思決定過程の支援には、オタワ個人意思決定ガイドにおける第4段階の「選択肢について比較検討する」を用い、「染色体検査の意思決定のためのワークシート」を作成した。染色体異常をもつ児の家族によるセルフサポートグループを対象とし、試作した染色体検査説明書の内容について調査票（30項目）を用いたレビューを依頼し、染色体検査説明書の改訂を図った。試作版は追加染色体検査説明書として改訂し、説明書内容は、染色体の基礎知識、染色体検査の基礎知識、検査の限界、追加検査、両親の保因者検査の検討と結果の伝え方、保因者の血縁者への情報提供、検査を受けることの利益・不利益とワークシート、結果説明方法，遺伝カウンセリングの紹介の加筆修正を実施した。今後、診療、遺伝カウンセリングの場で今回作成した染色体検査説明書を使用し、医師、看護職、認定遺伝カウンセラー、当事者による評価を行い、改訂を重ねていく必要がある。
足潰瘍予防のための靴の選択方法に関する研究 足潰瘍のない糖尿病患者自身における靴の選択基準 （査読付）	共著	平成28年3月	日本フットケア学会雑誌. 2016;14(1):11-5.	概要：糖尿病足潰瘍の予防には適切な靴の選択が重要であるが、糖尿病患者の靴の選択に関する報告は、靴の種類、サイズの適合などの実態に留まる。そこで靴の選択基準を明らかにするために糖尿病患者22名に靴の選択基準について半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。その結果、患者は《デザイン重視》、《機能性重視》、《履き心地重視》の観点から靴を選択しており、糖尿病足潰瘍を意識した靴の選択基準は抽出されなかった。今回の対象者が潰瘍のハイリスク状態ではなかったことが影響していると考えられるが、<着脱が楽な靴>など、足のトラブルの要因になりかねない選択基準が抽出されたことから、早期からの教育が必要であるといえる。さらに、《デザイン重視》は足部に特別な注意が必要でありながら疼痛という症状がない糖尿病に特徴的であると考えられ、糖尿病患者には特に、履き心地や機能性だけでなく、デザインも重視した治療靴の開発が必要であることが示唆された。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：古川久美子, 大江真琴, 保坂嘉成, 大橋優美子, 竹原君江, 村山陵子, 大友英子, 小見山智恵子, 加藤聡, 真田弘美.

看護師の末梢静脈路確保における留置針刺入・輸液ルート接続時の主観的体験 （査読付）	共著	平成29年1月	看護理工学会誌. 2017;4(1):67-72.	概要：患者への末梢静脈カテーテル留置場面での、留置針を刺入し輸液ルートを接続する際の看護師の主観的体験を明らかにすることを目的とした。都内一施設の看護師10名（経験年数3～14年）の実際の刺入場面を録画し、それを視聴しながら手技を行っていた際の気持ちなどについて半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。東京大学医学部倫理委員会の承認を受けた。分析の結果、【知識と経験に基づく血管選択の困難感】【末梢静脈路確保できないことへの不安感】【技術向上への思い】【血液に対する焦りと恐怖】【繁忙による焦り】【患者からの重圧】【末梢静脈路確保に伴う葛藤】の７カテゴリーが抽出された。技能の修得レベルの向上に伴い小さくなっていくカテゴリーもあったが、不安や困難感は完全には解消されなかった。看護技術をサポートすることで、困難感などの緩和、解消につながると考えられたカテゴリーも多く、末梢静脈留置針刺入の成功につながる可能性が示唆された。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：井上文, 保坂嘉成, 村山陵子, 田邊秀憲, 大江真琴, 内田美保, 小見山智恵子, 真田弘美.
東大病院における支持療法の標準化と普及を目的とした Cancer Board の取り組み.	—	平成22年9月	第48回日本癌治療学会学術集会, 京都	概要：【背景】支持療法はがん治療を安全かつ快適に行う上で極めて重要である。東大病院は、支持療法の重要性に対する認識は不十分であった。そこでCancer Board内部に支持療法ワーキンググループを発足させた。 【対象と方法】海外のガイドラインに基づき国内での用法用量や院内採用薬を考慮しマニュアルの作成に努めた。薬物による治療にとどまらず、支持療法に関する体系的な理解と実践を目的とした解説と看護師等コメディカルの積極的な介入を促すケア・アセスメントに関する記載を重視した。 【結果】2009年11月に嘔気嘔吐対策マニュアルを作成、2回の院内講習会を開催した。参加者の内訳は医師（研修医を含む）23%、看護師48%、薬剤師9%であった。同様の方法により、他の支持療法の標準化と普及を予定している。 【結論】病院における統一的な支持療法のマニュアル作成は多職種の介入によるチーム医療の実践の基盤となる。院内教育と普及、コンサルテーション制度の確立、マニュアルの有用性に関する客観的な検証が課題である。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：榎本裕, 吉田幸弘, 岩瀬哲, 神田橋宏治, 後藤悌, 黒田誠一郎, 保坂嘉成, 宮川清.

東大病院嘔気嘔吐対策マニュアルの作成と取り組み	—	平成23年1月	第25回日本がん看護学会学術集会, 神戸	概要：【背景】東大病院では、Cancer Board支持療法ワーキンググループ（WG）を発足させ、支持療法の標準化と普及を目的に活動を行っている。 【対象と方法】看護師等の積極的な介入を促すため嘔気嘔吐対策チェックシートを作成した。このシートは、患者側の危険因子、抗がん剤の危険因子から嘔気嘔吐のリスク評価を実施できる。さらにレジメンに沿った治療計画の確認と嘔気嘔吐の有害事象を評価できる構成になっている。さらに、急性・遅発嘔吐にも早期対応できるように、看護師がCTCAEv.4を電子カルテに記載し、医師やNSTと報告相談できるシステムを構築した。 【結果】東大病院嘔気嘔吐対策マニュアルによる統一した対策を行うことにより、嘔気嘔吐に対して他職種の早期介入も可能となった。 【結論】他職種が統一した医療チームとしての介入をできる基礎となった。今後、さらにマニュアルを作成して有効性を随時評価していくことが課題である。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：山下真登香，保坂嘉成，井上順子.
看護師による NCI-CTCAE(Common Toxicity Criteria of Adverse Event, National Cancer Institute 版)v.4 のgrade 分類への取り組み	—	平成23年1月	第25回日本がん看護学会学術集会, 神戸	概要：【目的】医療従事者が抗がん剤治療の有害事象を正しく評価することは重要である。看護師が主体的にCTCAEを用い、他職種と連携し早期介入を図ることを目的とした。 【対象と方法】対象の病棟看護師にCTCAEv.4のgrade分類方法を指導した。看護師のCTCAEv.4のgrade分類は、患者と医療従事者の評価を比較した試験で用いた６項目（全身倦怠感、疼痛、悪心、嘔気、下痢、便秘）を定時で評価することとした。さらに、病棟看護師が、Performance Status(PS) 3以上やCTCAEv.4 grade2以上に分類され、他職種による介入の必要性が高い患者を抽出した。看護師は、がん専門看護師、癌化学療法専門薬剤師、管理栄養士などに依頼し、有害事象の対応策について主治医を含めて話し合うシステムを構築し施行した。 【結果・考察】化学療法を実施する呼吸器内科疾患患者101名を対象とした。CTCAEv.4 grade2以上は57名、PS3以上は2名であった。化学療法の有害事象をCTCAEのgrade分類を用いて記載することにより、評価が統一された。CTCAEを用いた客観的な評価により、がん化学療法に携わる看護師が早期に各医療チームに連携を図り、有害事象に対して対策を講じることが可能となった。 【結論】東大病院の看護師がCTCAEv.4による評価を実践できる院内教育と普及が今後の課題である。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 共著者：保坂嘉成, 山下真登香, 鈴木彩子, 大木梨恵, 高梨陽子, 荒川結, 藤田智子, 手塚明子, 井上順子.

看護領域におけるleadr-member exchange(LMX)理論に関する文献レビュー	—	平成28年8月	第20回日本看護管理学会学術集会, 横浜	概要：【目的】看護領域においてleader-member exchange(LMX)理論というリーダーとフォロアーとの社会的関係性を用いて看護師離職を防ぐ目的で文献レビューを実施した。 【方法】PubMed, CINAHL, 医学中央雑誌で文献検索を実施した。フルテキスト入手できないものは除外とした。 【結果】LMX理論を主題とした研究論文22件あり、フルテキスト入手できない4件を除外し、15件分析した。 【考察】どの研究でもLMXの質は職務満足度や離職意向と正の相関性を示していた。 【結論】看護領域においてもLMX理論が有用であることが示された。 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能 川口倖左, 武村雪絵, 竹原君江, 駒形和典, 池田真理, 小見山智恵子, 相馬光代, 小畠りり, 保坂嘉成.
HIV 陽性者を含むLGBTQ+当事者のための新しいオンライン依存症自助グルー プ“アディクション・ぽーと”の意義と価値	共著	令和5年12月	第37回日本エイズ学会学術集会, 京都	目的：本研究は，オンラインピアサポートコミュニティ「アディクション・ぽーと」が,HIV陽性者を含むLGBTQ+依存症者に提供するサポートの意義と価値を明らかにすることを目的とする。特に，参加者の体験を通じて，ピアサポートの心理的および社会的効果を探求し，継続的支援のための課題を検討する。 方法：対象は58 名である。質的記述的デザインを採用し，2024 年5 月から12 月にかけて実施された計13回のオンラインミーティングで話された内容を逐語的に収集・転写したうえ内容分析を行った。 結果：分析の結果，3つの主要なコアカテゴリーが抽出された。【ピアサポートの意義と特徴】として，異なる依存症やセクシャリティの体験共有を通じて，自己理解とエンパワメントが促進された。 【ピアサポートによる価値と効果】として，安心・安全な場での対話がスティグマの解放や心理的安心感をもたらした。【ピアサポートの役割と課題】として，活動の継続性や広報啓発の重要性が指摘された。 結論： 本研究は，LGBTQ＋依存症者に対するオンラインピアサポートの有効性を示す新たな知見を提供した。さらにピアサポートによって参加者の自己成長や自己表現が促進され，スティグマ解放の場として機能する点が強調された。今後は，支援の持続可能性評価および異文化背景への適用可能性検証が求められる。

染色体検査における自律的意思決定支援のための検査説明書の開発	共著	令和6年2年	医療創生大学研究紀要	【修士論文の論文投稿】説明書項目の検討には，遺伝学的検査に関するガイドライン（遺伝医学関連10学会　平成15年）およびO’Connorらの国際共同研究 IPDAS Collaborationによる意思決定支援ツールの品質評価基準（64項目）を用いた。染色体検査説明書に適した27項目を採用した。意思決定過程の支援には、オタワ個人意思決定ガイドにおける第4段階の「選択肢について比較検討する」を用い、「染色体検査の意思決定のためのワークシート」を作成した。染色体異常をもつ児の家族によるセルフサポートグループを対象とし、試作した染色体検査説明書の内容について調査票（30項目）を用いたレビューを依頼し、染色体検査説明書の改訂を図った。試作版は追加染色体検査説明書として改訂し、説明書内容は、染色体の基礎知識、染色体検査の基礎知識、検査の限界、追加検査、両親の保因者検査の検討と結果の伝え方、保因者の血縁者への情報提供、検査を受けることの利益・不利益とワークシート、結果説明方法，遺伝カウンセリングの紹介の加筆修正を実施した。今後、診療、遺伝カウンセリングの場で今回作成した染色体検査説明書を使用し、医師、看護職、認定遺伝カウンセラー、当事者による評価を行い、改訂を重ねていく必要がある。
HIV陽性者やLGBTQ＋当事者のための新しいオンライン依存症自助グループの効果 -自己効力感に焦点を当てて-	共著	令和6年11月	第38回日本エイズ学会学術集会，東京	【背景】現代社会において、HIV陽性者を含むLGBTQ+当事者は、依存症や精神的な問題を含む多様な心理的および社会的課題に直面している。HIV感染症は全世界で約3,800万人おり、LGBTQ+コミュニティ内での感染率の高さが問題とされている。個人は、健康問題だけでなく、社会的スティグマや差別による心理的ストレスも経験しており、これが依存症のリスクを高める要因となっている。自己効力感（self-efficacy）は、特定の課題や困難に直面した際に、自分自身がそれを対処できるという信念を持つ能力であり、心理的健康および行動変容の要素である。オンライン自助グループは、このような問題に対処するための支援ツールとして注目されている。特に、匿名性や全国からのアクセスの容易さが、対面での支援が困難なHIV陽性者やLGBTQ+当事者にとって大きな利点となる。【目的】本研究は、オンライン自助グループが依存症を抱えるHIV陽性者およびLGBTQ+当事者にどのようなピアサポートを提供できるのか、また、そのサポートが自己効力感にどのように影響するのかを明らかにすることを目的とする。【方法】本研究はグランデット・セオリー・アプローチ（GTA）を採用した。対象者はHIV陽性者およびLGBTQ+当事者で、「アディクション・ぽーと」に参加経験のある者とした。データは議事録から収集され、GTAに基づきカテゴリー化し分析した。【結果と考察】データ分析の結果、「自己認識の向上」、「安心感の形成」、「経験の共有」、「前向きな変化」の4つの主要なカテゴリーが抽出された。本研究は、ピアサポートがこの4つのカテゴリーを通じて、参加者の自己効力感を向上させることが示唆された。【結論】本研究は、オンライン自助グループがHIV陽性者およびLGBTQ+当事者の自己効力感向上に寄与することを示している。今後の研究では、ピアサポートが提供する具体的な支援内容やその効果をさらに詳細に検討することが求められる。
（その他） なし				